

真理通信

第 81 号 平成 25 年 (2013 年) 3 月 1 日発行

巻頭

聞くこと 少なきひとは

かの犁(すき)をひく 牡牛(如し)のごとく

ただ老ゆるなり その内は肥(こ)ゆれど

その智慧は 増すことなからん (法句輕 152)

◇新：法句經講義 39◇

<※「新・法句經講義」は、巻頭ページ掲載の法句經について解説しています。>

「そんなこと知ってる」「そんなこと分かってる」と言われると、相手が子どもであろうと大人であろうと、どうすることも出来ません。相手が子どもで、どうしても分からせたいことがあったら、怒鳴りつけることになるかも知れません。

ここで言う「聞くこと少なき人」には、人の意見や話を聞かない人ばかりでなく、学ばない人も含まれています。「学ぶ」というのは、自分の知らないこと気づかなかったことを、自分の中に取り入れていくことです。

自分の考えや意見をより深くしていくためには、自分を変えようとしなければなりません。畑を耕す牛のように、毎日同じことを繰り返していたら、年をとり肥るばかりで、本当の智慧は増えません。自分の意見を変える、自分を変えるには勇気もいります。牛の持たない勇気をもって、人の意見を聞き学ぶことです。

最近、人の意見に左右されてフラフラすることを「ぶれる」と言います。確かに「決められない〇〇」では困りますが、頑迷固執して石のように変わらないのも発展がありません。人の意見を聞き、またいろいろな機会に学びながら、自分を深め、高めていきたいものです。

仏教豆知識 59

苦

「苦」(く)とは、言うまでもなく「苦しみ」のことです。「樂あれば苦あり」「苦樂をともしする」などと言われるように、楽しいことの反対が苦しみです。

でも仏教では、「一切皆苦」(いっさい拙ペ) <すべてのものは苦である>と言い、樂もまた苦となることを説いています。お釈迦さまの最も大切な教え「四諦」(はい)は、この苦をどう克服していくかという教えです。苦には「生・老・病・死」の「四

苦」(しく)をはじめ「愛別離苦」など「八苦」があげられます。「苦」をどう克服するかは、いつの時代でも私たちの最終目標です。仏教は、そのために生まれた宗教です。

< 主筆所感 >

人生の入口と出口

友松浩志

人生には、入口と出口があります。言うまでもなく、入口とは「誕生」であり、出口は「死」です。誰もがこの入口から入り、この出口から出ていきます。

入ってきた人生の舞台上で、人は、成長し、学び、働き、家庭を作り、子を育み、やがて老い、出ていく。大成功の人生もあるだろうし、大失敗の人生もあるかもしれない。思い通りにならないのが人生というけれど、運もあるかもしれない。いずれにしろ、その評価は、舞台のうえでの話です。

人生の入口と出口は、その人にはどうすることも出来ない事柄です。いつどこに生まれようか、計画して生まれてきた人はいません。どこでどうやって死のうか、計画して実行する人はいませんが、そうだろう(自殺しよう)と思って生きてきた人はいないはずです。

だからこそ、人生の入口と出口は、誰にとっても安心な幸福なものになるよう、みんなで努力しなければなりません。不安な誕生・不安な死。幸福でない誕生・幸福でない死。そんなものが人生の両端にひかえていたら、誰が一生懸命生きようとするでしょう。

少子高齢化対策として、じゃんじゃん作られる保育園や老人ホーム。それも最近では、大規模な事業所が経営するのがほとんどです。一日の大半を保育園で過ごし、仕事として育てられる子ども達。老いては、家族とつくり上げた家から離れて、知らない土地で知らない人たちと生活する老後の人生。はたしてそれが、本当に安心で幸福な人生の入口・出口なのでしょう。

子どもは、親にたくさん甘えたくて、喜んで迎えられたくて生まれてくるものです。誰が育てても同じだという理論は理論にすぎません。死を前にした人は、親しんだ土地で、親しんだ人たちに囲まれて死んでいきたいものです。親しさに甘えて死んでいきたいものです。その甘えを、優しく受けとめられる社会をつくることこそが、すべての人の幸福につながるように思います。

真理通信

第 82 号 平成 25 年 (2013 年) 7 月 1 日発行

巻頭

起くべき時に 起きず

わかき日を 怠情(おこたり)にふけり

思惟(おもい)はよわく 思量(はかり)すくなし

かかるはげみなき者は 智慧をえ

道を知るあたわざらん (法句経 280)

◇新：法句経講義 4 ◇

<※「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。>

若き日をボヤボヤと過ごしていると、あつと言う間に時は過ぎ去ってしまうぞという教えは、古今東西すべての文化に共通しているものでしょう。ということは、若者というのは、いつでも、どこでも、ボヤボヤと時を過ごしてきたとも言えるでしょう。

この法句経では、「起くべき時に起きず」と言っていますが、「時」というものを知らないのが若者です。時間は無限にある、と思っているのが若者です。だから一日寝ていても平気だし、何かの機会を逃しても、またそうした機会はあるだろうと先延ばしにしてしまうのです。

勿論、すべての若者がそうなのではありません。それどころか、今では年輩の人たちまでが、ボヤボヤと時間を使っているような気がします。怠情にふけらずはげみを持って毎日に取り組むことは、年齢をこえて私たちすべてに求められています。思いを強くもって、よく考えて人生を歩むことは、いつでも大きな発見を私たちにもたらしてくれます。80 歳でエベレストの頂上に立った三浦雄一郎氏の姿に、人生の開放の喜びを感じたのはそのためでしょう

仏教豆知識 60

行

「行」(ぎょう・samskāra)という言葉は、仏教では「修行」(しゅぎょう)の意味で使うことが多いのですが、インドで用いられたこの言葉本来の意味は、「ものをつくること」と「ものが移りかわること」の両方だと言われます。ものは「行為」によって産み出される(業)、という考え方は、西洋の「すべては神がつくった」という考え

に通じる考え方ですし、一方の「すべては変化して止まらない」(諸行無常)という考え方は、きわめて東洋的な考え方です。インドの文化には、こうした東西の両面性が隠されていることは、とても面白いことです。

< 主筆所感 >

生きる手がかり

友松浩志

一休さんのトンチ話に、「このはし わたるべからず」と書かれた橋の「まん中」を、どうどうと渡っていく一休さんの話があります。「橋」と「端」をかけたトンチ話で、誰でも知っている話です。でもこの話し、結構、仏教的に深いものがあります。

まず、橋です。橋はこちら側から、あちら側に渡っていくものです。仏教では、こちら岸(此岸)からあちら岸(彼岸)に渡ることを、「人生」にたとえて説きます。そして、端です。端というのは、片方にかたよっています。右端にいたら、左側は見えませんが、左端にいたら、また反対は見えませんが、まん中にいてこそ、両側が見えるのです。これを、「中道」(ちゅうどう)といいます。端に片寄らない教え、それが「中道」の教えです。

なぜ仏教で「中道」が説かれたのか。それは、お釈迦様の修行の仕方にあつたと言われます。お釈迦様の時代、バラモン僧は、極端な苦行を行っていたようです。逆さ吊りになったり、断食したり、今でもそうした修行をする人はいますが、それだけが修行だとしたら、それをなし遂げる人はとても少ないはずですが、お釈迦様は、まずそれを否定したのです。反対は快樂主義です。何でも欲しいままにするのが、人間にとって一番いいことだと考える方法。極端な人は少ないとしても、便利第一、利益優先主義は、現代人にも通じるものです。お釈迦様は、それもまた否定されたのです。

苦行も取らず、快樂も取らない、そのまん中を行くというのが、仏教の教えです。だから仏教のお坊さんは「空中浮遊」などしなくていいのです。もちろん、ぜい沢さんまいもいけません。物ごとを判断する時、その手がかりを与えるのが、宗教の大きな役割だと思えます。A 案と B 案が対立した時、多数決とか投票で、どうしてもどちらかにするのが西洋流だとしたら、A 案と B 案のまん中をさぐるのがこの「中道」(middle way)の教えです。「生きる手がかり」としての宗教に、もっと関心をもついい時代がきているような気がします。

真理通信

第 83 号 平成 25 年 (2013 年) 11 月 1 日発行

巻頭

すべての行(もの)は無常なり

と かくのごとく 智慧もて知らば

彼は その苦をいとふべし

これ清浄に入るの道なり

(法句經 277)

◇新：法句經講義 4 1◇

<※「新・法句經講義」は、巻頭ページ掲載の法句經について解説しています。>

このところ、戦後活躍したスターや有名人など、次々と亡くなる報に接するとつくづく世の無常を感じます。若く元気だった俳優さんも、やがて年を重ね、いつかあまり見かけなくなったかと思うと、突然訃報が報じられる。何とも悲しい現実です。

そんな具合に、どんなに特別に思えた人も、「無常」という道理に反して生き続けることは出来ない。どんな人にも、どんな物にも、無常の風は吹いている。そのことに気づけば(智慧を持って知れば)、「無常」をおそれることはない。それこそ、真実の生き方—とらわれのない生き方への入り口ではないか、とここで法句經は伝えようとしているのです。

「平家物語」に出てくる「諸行無常の鐘の響」という教えが、すでに法句經のなかにはっきりと説かれている。つまり「諸行無常」という教えが、仏教の始まった頃から説かれてきた、お釈迦様ご自身の教えであったことが分かります。

複雑に発展した仏教の教えのなかにも、その始まりの時から説かれ続けている根幹になる教えが含まれているのです。

仏教豆知識 61

安心

安心というと、安全・安心といった意味で、心が安らかで不安のない状態をさす言葉ですが、仏教ではこれを「あんじん」と読み、信仰のもとづく心の境地を表す言葉として、とても大切に考えます。宗派によって、そのとらえ方は異なるようですが、浄土系の教えでは、阿弥陀仏を信じて、極楽浄土に往生するための心の持ち方を言います。浄土真宗では、親鸞聖人の説く教えと異なる考え方を「異安心(いあんじん)」と言います。また禅宗で

は「安心立命」といい心身を天命にまかせる境地をさします。この場合は普通、「あんしんりつめい」と読みます。

< 主管所感 >

冬の庭に立って

友松浩志

私の母はよく文章を書いた人で、本紙の前身である「真理」誌にも多くの随筆を残した人です。その文章を集めた随筆集「れんげの花はまだ咲かない」は、母の三回忌に出版した本ですが、子どもの私か言うのも気がひけませんが、随筆というもののお手本のような、巧みな文章が並んでいます。

英文学者の福原麟太郎という人が「随筆とは、知識でもなく、意見でもなく、叡知を人情に溶かして語るもの」であり「個人の身の上を語りながら、人の心のなかに潜んでいる共通点に触れて、互いの人生を楽しむ文章だ」と言っています。巧みな随筆というのは、確かに読んでいてホロッとしたり、ニヤッとしたり、言われぬ楽しみがあるものです。

そんな母の随筆のなかに「老いの日の為の用意をはじめる年」という文章があります。50代後半に書いたものです。「白髪が多くなった、目は老眼になった、耳も遠くなった舌もあやしくなった。そのうえ、たんすの上にビニールに入れたハムがある。なぜ冷蔵庫に入れたはずのハムがそこにあるのか、まったく見当がつかない。老いの日の為に、これからどんな設計をしたものか、冬の庭に立って、ひよどりの声を聞きながら足もとを見つめている」といった文章です。

このところ、子どもである私自身の現実がそうなってきました。白髪、老眼は言うにおよばず、背中に激痛が走って、救急車で病院に運ばれてみれば尿路結石。男性更年期の証明みたいなものです。そのうえ先日、発車しようとする電車にかけ込もうとして、左足がグキッと曲がって捻挫。しばらく足を引きずりながら歩くことになり、堂々とシルバーシートに座ってみると、案外居心地がよくて、少し怖い。

いったい自分は、老いに向かってどうすればいいのか。母は、年とともに良くなる、と人に言われて「謡」を始めたのですが、私は何を始めるのか。というより、今やっている何を続け、何をやめたらいいのか。自分の人生を設計するために、私も冬の庭に立って、足もとを見つめています。小さな庭に、今年もひよどりの声が響いています。